

日蓮大聖人御書全集

ときどのごへんじ

富木殿御返事

ひも かたびら こと

(悲母の帷の事)

新版  
1305  
〜  
1306

ときどのごへんじ ひも かたびら こと  
富木殿御返事（悲母の帷の事）

ぶんえい ねん  
文永12年（75）

がつ にち  
2月7日

さい  
54歳

ときじょうにん  
富木常忍

ときどのごへんじ  
富木殿御返事

にちれん  
日蓮

かたびらいちりよう

た そうら

お

帷 一領、給び候い了わんぬ。

そ ぶつでし なか びくいちにん

夫れ、仏弟子の中、比丘一人はんべり。

ききん よ

飢饉の世に、仏

おんときこと 欠 そうら

の御時事かけて候いければ、比丘、袈裟をうってその

価 ほとけ たてまつ ほとけ ゆらい と たま

あたいを仏に奉る。仏、その由来を問い給いければ、

しかじかと、ありのままに申しけり。仏云わく「袈裟は

もう ほとけのたま けさ

さんぜ しょぶつ げだつ ほうえ

これ三世の諸仏の解脱の法衣なり。このあたいをば我ほう

働 報

じたい びくもう

じがたし」と辞退しましたししかば、この比丘申さく「さ

けさ 働 もう ほとけ

て、この袈裟あたいをばいかんがせん」と申しければ、仏

のたま なんじ ひも あ いな こた い あ ほとけ

云わく「汝、悲母有りや不や」。答えて云わく「有り」。仏

のたま けさ なんじ はは くよう びく

云わく「この袈裟をば、汝、母に供養すべし」。この比丘、

ほとけ い ほとけ さんがい うち だいいち どくそん いっさい

仏に云わく「仏は、この三界の中、第一の特尊なり。一切

しゅじよう げんもく じっぽうせかい おお ころも

衆生の眼目にておわす。たとい十方世界を覆う衣なりと

だいち 敷 けさ よ ほう たも わ はは

も、大地にしく袈裟なりとも、能く報じ給うべし。我が母は

むち うし ひつじ 果 無

無智なること、牛のごとし、羊よりもはかなし。いかでか

袈裟けさの信施しんせをほうぜん報と云々。うんぬん 仏ほとけ、返かえして告つげて云のたまわ

く「汝なんじが身みをば誰たれか生うみしぞや。汝なんじが母はは、これを生うむ。

この袈裟けさの恩おん、報ほうじぬべし」等云々。とううんぬん

これはまた、よわいくじゆん 齡九旬至にいたれる悲母ひもの、愛子あいしにこれを

進進まいらせさせ給たもう。しかも我われと老眼ろうげんをしぼり、身命しんみようを尽つく

せり。「我われ、子この身みとしてこの帷かたびらの恩おんかたし」とおぼして思

遣遣つかわせるか。にちれん 日蓮報、また、ほうじがたし。しかれども、

また、返かえすべきにあらず。この帷かたびらをきて、日天着の御前にってんに

してこの子細しさいを申し上もうぐれば、定さだめて釈梵しやくぼん諸天しよてんしろしめす知

かたびら ひと

じつぼう してん

知 たも

べし。帷は一つなれども、十方の諸天これをしり給うべ

つゆ たいかい 寄 つち だいち くわ

し。露を大海によせ、土を大地に加うるがごとし。生々に

きようきようきんげん

う 失せじ。世々にくちざらんかし。恐々謹言。

にがつなのか

にちれん かおう

二月七日

日蓮 花押